光源氏物語現行形態試論第六
――先行物語の季節

田村俊介

序

光源氏物語全四十一帖が正伝と傍流に分かれているのは、ある程度客観的に認められているだろう。正伝とは、所謂「紫上系」十七帖と所謂「第二部」八帖とを合わせた部分であるが、私は、このうち、桐壺巻前半と若菜三帖とを除いた部分を「勢語系」と名付け、『伊勢物語』が原型であることを仮説した。いっぽう、傍流とは所謂「玉鬘系」十六帖のことであるが、『うつほ物語』第二主題系（恋愛や結婚が主題となる系列）が原型だと考え、「宇津保系」と名付けている（注1）。

本拙稿第1節では『うつほ』第二主題系と『源氏』宇津保系の巻々の季節観、第2節では『伊勢』と、『源氏』勢語系の巻々の季節観を考察する予定である。

『源氏物語』の季節観に関する先行研究として参照したのは、勉誠社『源氏物語講座』第十巻として出版された『源氏物語研究文献目録』（平成五年）249頁13行目～251頁2行目の全四十二篇である。特に、渋谷栄一氏「源氏物語の季節と物語 ― 春」が本拙稿に着想を与えてくれた（注2）。

又、平成十一年吉海直人氏『源氏物語研究ハンドブック（2）』「〈宇津保物語引用〉関係研究文献目録」の1番から19番まで全十九篇を参照した。

なお、次の第1節で扱う内容に対して、非公式な場で、次の二つの御教示、若しくは、お叱りを頂いた。

一、『うつほ物語』の先行論文で重要なものを見落としている。

二、『うつほ物語』は必ずしも「夏の文学」という言葉が当てはまらない側面もある。

このうちまず第一点に就いては、本拙稿のテーマに限らず、先行研究の吸収に完璧を期そうとすれば無限に論文

収集を行なわなければならないので、私は特定の文献目録を使用することにしている。その代わり、その文献目録に挙げられた論文は取捨選択せず、全て読んでいる。『源氏物語研究ハンドブック（2）』はたった一年前に出版されたものでもあるし、勿論、故意に無視したというわけではないので、それ以外の論文の見落としに関しては今回はひとまず御容赦頂きたい。御教示の後、改めて考えて行く所存である。もう一つ、本拙稿のテーマに即して言えば、昭和や平成の『うつほ』観よりも一条朝のそれのほうが重要である。従って、本拙稿第4節では『枕草子』の『うつほ』享受を明らかにする予定である。第二点に就いても、もとより私は『うつほ』が春や秋（初冬）の自然美もそれなりに好んで居ることを充分承知して居り、にもかかわらず敢えて「夏の文学」と言い切ってしまったのは、清少納言の『うつほ』観を重んじた結果である（注3）。

1

初音巻から行幸巻〔三〕段落までの部分は「月並みの巻々」と呼ばれ、「初音」「胡蝶」が春、「螢」「常夏」が夏、「篝火」「野分」が秋、「行幸」が冬の巻とされることが多い。しかし、「篝火」に就いて言えば、常夏巻で光源氏が「灯籠に大殿油まゐれり。」という時に、

「なほ近くて暑かはしや。篝火こそよけれ。」（229頁）（注4）

と言っているので、より正確には夏の季節観を感じ取るべきなのである。一歩譲って通説通り「秋」だとしても、かなり残暑厳しい秋だと言わなくてはならない。篝火巻が「「秋の」といっても「夏の」といってもよい、一定の時期」であることは田中新一氏も指摘している（注5）。実際、〔一〕が夏の段落、〔二〕以降が秋の段落であるのだが、このように二つの季節に跨る巻として「胡蝶」も挙げることができる、蝶が野山を飛び回る季節も春だけでは終わらないし、実際、〔三〕までが春の段落、〔四〕以降が夏の段落なのである。

以上見て来たように、月並み七帖のうちの二つを春の巻、二つを秋の巻に分類するのは『古今集』の部立に基づいた誤解であり、巻名に基づいても、ページ数を数えてみても、三つの季節の比は「春1・5　対　夏3　対　1・5」とすべきであろう（図1）（注6）。

玉鬘求婚譚がこのように夏重視の月並みの巻々で繰り広げられることになったのは、玉鬘のモデルであるあて宮の求婚譚の巻々の季節観に由来しているのではなかろうか。『うつほ物語』の第二帖「藤原の君」、第四帖「春日詣」～第九帖「菊の宴」、第十帖「あて宮」の前

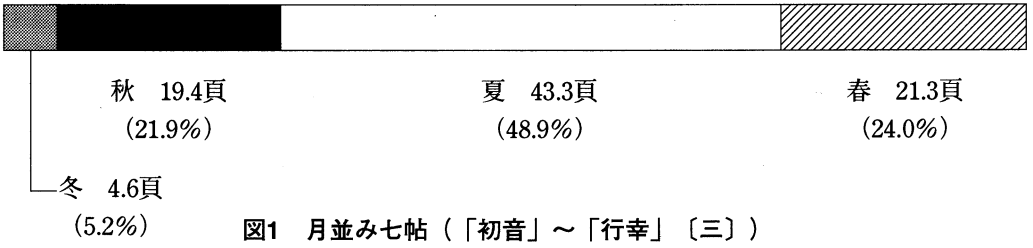


図1　月並み七帖（「初音」～「行幸」〔三〕）

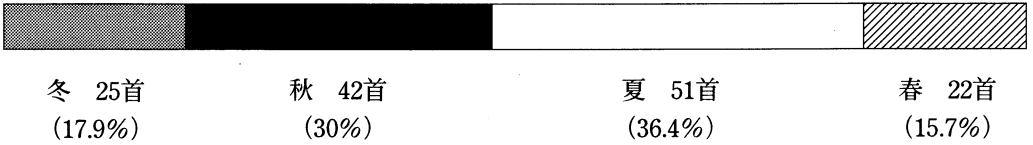


図2　あて宮14才（「菊の宴」313頁8行目まで）の相聞歌
季節・無関係63首

半などあて宮中心の約九帖は、春夏秋の三つの季節が対等に重んぜられている（注7）。十四才のあて宮に寄せられた求愛歌・求婚歌、それに対するあて宮の答歌を調査してみると、図2で示したように、春二十二首（斜線部）、夏五十一首（白の部分）、秋四十二首（黒の部分）、冬二十五首（点々の部分）（以上、本拙稿では、図1～図4、図7の五つの図を通して、季節の模様を統一させている）、季節不明、季節無関係及びあて宮への直接の求愛歌と考えにくい歌六十三首という結果が出た。（なお、菊の宴巻後半を調査の対象からはずしたのは、この部分は『源氏物語』で言うと、月並み七帖からはずれている藤袴巻、玉鬘入内直前の部分に当たると考えたからである。）論者に拠っては、多少違った数字が出るだろう。しかし、少なくとも、夏が春や秋と比べて軽んじられているとは言えないと思う。特に、『うつほ物語』の主題があて宮の結婚に一点集中する「祭の使」が夏の巻であるのは重要である。祭の使巻に入ると、「懸想人たちのあて宮への贈歌が一群となって記される」ようになる（新全集〔二〕段落上段鑑賞欄参照）、しかもそのような場面が、夏のうちに、三回も作り設けられている（他に、〔八〕段落、〔一二〕段落鑑賞欄参照）ので、この巻は、『源氏』で言うと胡蝶巻後半に当たる。胡蝶巻の〔四〕段落は、六条院新築祝いを主題としたそれ以前と様変りして、いよいよ玉鬘が主役の座に就く。冒頭の一文

　更衣のいまめかしう改まれるころほひ、空のけしきなどさへあやしうそこはかとなくをかしきを…

…、対の御方に、人々の御文しげくなりゆくを、

に示されている通り、四月の声を聞き、野や山の木々が茂り行くのと歩調を合わせるように玉鬘への懸想文が「しげくなりゆく」のである。物語はそのうちの三人の懸想文と光源氏の批評・処世訓を詳述し、さらにその後、「和して且清し」と漢詩に謳われた初夏の空によく似合う玉鬘の容姿と人柄を語ることになる。「橘の実」に比えられたり、螢の光に「そびやか」な体つきが照らし出されたりして、読者の脳裏には、夏の景物と玉鬘が離れがたく定着して行くはずである。

　同じ玉鬘系でも、前半の夕顔や末摘花の物語は、秋を頂点に進行する。まず、第二帖「帚木」〔一〇〕段落から垣間見られる、夕顔の頭中将との物語では、

　……秋も来にけり

という和歌が詠まれている。次に第四帖「夕顔」では、同じ夕顔の光源氏との物語が、八月十五日前後を中心に詳述されることになる。更に第六帖「末摘花」でも、末摘花は八月二十余日、光源氏と新枕を結んでいるが、これらは全て、『うつほ物語』第二主題系初期の俊蔭女物

語が「八月中の十日ばかり」の新枕だったからである。

人物造型はかなり違う。『源氏』の螢巻の物語論であて宮は「女しきところ」無し、と評されているが、彼女の性格を百八十度逆転させたのが藤袴巻末で「女の御心ばへ」の「本（＝手本）」と絶賛されている玉鬘であると思う。三首の贈歌にようやく小声で一首の答歌を口ずさむ俊蔭女の受動的な性格と、自分から贈歌し、誘惑した夕顔の能動的な性格も正反対であるが、それでもやはりあて宮がモデルであり、又、俊蔭女がモデルであることを読者に知らせるサインとして季節の一致が機能しているのではなかろうか。

紫式部が『うつほ物語』の季節観にどれ程忠実であったかは、夕霧巻〔二〕段落の

八月中の十日ばかりなれば、野辺のけしきもをかしきころなるに

同じ巻の〔一八〕段落の

九月十余日、野山のけしきは、深く見知らぬ人だにただにやはおぼゆる。

総角巻の〔一九〕段落の

九月十日のほどなれば、野山のけしきも思ひやらるるに

に拠っても明らかだろう。三つの文は全て、「年の内、木・草の盛り、秋のほどに、いつか」という帝の御下問に、少将仲頼が

「野の盛りは、八月中の十日、山の盛りは、九月上の十日のほどになむ。」

と答えた吹上下巻巻頭を踏まえている（注8）。ただ、『うつほ』の一文を『源氏』の特定の巻の特定の段落に引用するのではなく、三箇所に分散して引用するあたり、何とも紫式部らしいではないか。

2

以上前節では、傍証として他の巻に言及することもあったが、基本的には玉鬘系巻々を考察の対象とした。

本節では勢語系巻々の季節観を考察する。

桐壺巻、若菜三帖を除く（注9）正伝の巻々を調査してみたところ、図3のような結果が出た。即ち、春166・0頁、秋200・8頁が明らかに夏125・6頁を上回っているのである。この統計はできる限り機械的に数えた結果であるが、その季節の自然が物語の中で好ましく描かれているかどうかという観点から見ると、なお一層、夏の比重は軽くなるだろう。例えば、第四十帖「御法」の場合、〔一〕はそれ以前の数年間の総括なのでカウントせず、〔二〕〔三〕は春、〔四〕〔五〕は夏、〔六〕以降は秋としてページ数をカウントしたのであるが、果して〔四〕〔五〕は内容上「夏の段落」と呼べる

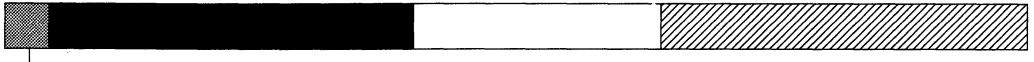
冬　129.0頁
(20.7%)

秋　200.8頁
(32.3%)

夏　125.6頁
(20.2%)

春　166.0頁
(26.7%)

図3　正伝（「桐壺」、若菜三帖除く）



秋　25首
(35.7%)

夏　17首
(24.3%)

春　25首
(35.7%)

冬　3首
(4.3%)

図4　伊勢物語和歌

だろうか。

「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」　（［五］）

紫上が匂宮に伝えた詞である。紫上は「この前の対なる」と言って、もしそうすることができたなら、庭を指さしたはずだが、指された先に今咲いている夏の花には全く触れず、九ヶ月先の紅梅と桜に思いを馳せている。あと九ヶ月生きることができないのなら、仏になった自分の前にまっ先に供えてほしいのは春の花だと言っている。

このように正伝の巻々では、春の段落のあと夏の景物には触れずに秋の段落へと進むことがしばしばある。夏が飛ばされないとすれば、葵上が六条御息所と車争いをしたり、六条御息所が生霊と化（な）ったり（葵巻）、光源氏が源典侍とかかずらわったり（紅葉賀巻）、とかく凶事・失敗が起こる。特に賢木巻巻末の夏は、そのあとの須磨流謫という結果から見て、光源氏の生涯最大の失敗であった。渋谷栄一氏が

夏を季節的背景にしたところには、……多くの密通・密会の物語が語られている　（注10）

と述べている通りである。

夏が忌み嫌われ、春秋重視、そして「紫上系」という言葉があるくらい紫上の主人公性が強いから、どちらかと言えば秋よりも春が好まれるというのが正伝の傾向であるが、これを一言でまとめると、「伊勢物語的季節観」ということになるだろう。業平実作の和歌として、

世の中に絶えて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし　（第八十二段第一段落。『古今集』等では、第二句「さかざらは」）

が広く人口に膾炙したらしく、『伊勢物語』は第一次成立章段のみならず、第二次・第三次に至るまで、「春を好み、夏を嫌う」傾向が強い。試みに、比較的季節がはっきりしていると思われる七十首のみを調査してみたところ図4のようになったが、その季節がその章段の中で好ましく迎えられているかどうかという観点から見ると、なお一層、夏の比重は軽くなるだろう。例えば、第九十一段の

をしめども春のかぎりの今日の日の
夕暮れにさへなりにけるかな

という独詠歌は、いっぽうで「夏嫌い」という印象を抱かせる。第九十四段は

秋の夜は春日わするるものなれや
霞に霧や千重まさるらむ

千々の秋ひとつの春にむかはめや
紅葉も花もともにこそ散れ

という贈答を中心に構成されているが、「霞」―「霧」、「花」―「紅葉」という春秋の景物の優劣のみが歌題とされ、「夏」は等閑に付されている。夏とは、何かの蔭に隠れて秋まで我慢する時期であり、冬も何かの蔭に隠れて春を待つ時期であったことは第七十九段の

わが門に千ひろあるかげを植ゑつれば
夏冬たれか隠れざるべき

によってわかる。第四段、

……又の年の正月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひていきて、立ちて見、居て見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣くかへりにけり。

も、昔男の春を好む心が前提としてある。愛する人と一緒でなければ美しい春も美しく見えない、というこの段の主題は、正伝の大尾幻巻にも引き継がれ、愛する紫上と一緒でなければ素敵な春も素敵に感じられない、と謳い直されている（注11）。ところが、幻巻の場合、その次の四月や五月も飛ばされず、視覚的聴覚的嗅覚的に自然描写されている点『うつほ物語』の季節観も入っていると言えるだろう。

幻巻が一月から十二月まで一月も欠かさぬ月並みの形を取っているのは、『うつほ』の大尾楼の上下巻の一月から八月まで一月も欠かさぬ月並みの形態の投影であって、その月その月の景物や年中行事も照応することが多いと以前述べたことがあるので、もう繰り返さない（注12）。しかし、以前は、楼の上下巻が八月十五日で終り、幻巻が十二月月末で終わる違いについては述べなかった。ヒントを与えてくれたのは、窪田繁夫氏「平安朝文学の自然描写序説 ― 源氏物語の季節 ―」である。

秋の叙述は春が色を中心とした叙述であり、感じ方であるとすれば、秋は音を中心とした季節の感じ方である。（注13）

窪田氏は、論文の副題に示されている通りあくまで『源氏物語』に関して述べて居るのであり、私も確かに『源氏』によくあてはまると思うが、敢えて『うつほ物語』の読解にも応用したい。

そもそも平安朝の音楽とは原則として野外コンサートであり、『うつほ物語』にとって一番大切なのは自然に調和する芸術を創り出すこと、

四季折々の妙音、森羅万象の変化と無常、人間の深い思いとの霊妙な調和などの中に天上の美を垣間見ることである（大系『宇津保物語』第三巻解説）。野外である以上、その季節その季節によって、音楽的環境が目まぐるしく変化する。人間のほうが、絃をゆるめたり張りつめたり、演奏法を工夫したりして、その変化に調和させて行かなくてはならない。総まとめの巻が月並み記事となったのは必然的だったのである。ところが、いくらその季節その季節の掛けがえの無い魅力と言っても、音楽的環境が理想的になるのは、即ち琴の音色が最も冴え渡るのは秋である。楼の上下巻の大団円が秋の最中（もなか）であったのも必然的だったのである。しかしながら、幻巻は必ずしも琴の音色を主題とせず、それどころか喪に服している期間は音楽の演奏は禁物なので（注14）、『うつほ』につき合って秋の最中で筆を擱くということはなく、光源氏が自らの人生の終りを述懐するのに最もふさわしい季節として、十二月の月末が大団円になったのである。

紫式部は『うつほ物語』にどこまでも忠実であった。違うところは、人事のほうの違いに適応した必要最少限の修正だけだと思う。

3

昭和六十一年四月、『国文学解釈と鑑賞　別冊』に於いて、武田宗俊氏の玉鬘系後記説（注15）の特集が組まれ、

現時点における構想論・成立論の立場から見た武田宗俊説についての見解

というテーマのもと、二十三名の論者が原稿を寄せた（以下、これを成立論特集号と言う）。その中の大部分、少なくとも半分以上は賛成したり、賛否の判断は留保しつつも今後もその問題の研究を続けるべきだと述べたり、或いは、別の視角に立って再検討することを説き、或いは批判的論調に終始しながらその功績をたたえている、要するに武田氏論文を重視しているのである。

もっとも、昭和五十年代頃から、武田氏への賛否両論に関して長い「沈黙」の状態に入った、武田氏説は「黙殺」されつつある、という見方もあった。確かに、右の二十三氏の中でも石田穣二氏や玉上琢彌氏らは武田氏説への無関心を標榜しているが、両氏は昭和の半ば頃からそのような態度を貫いているのであって、学界の大勢に就いて「沈黙」「黙殺」という言葉が使われたのはいささかオーバーであった。本当に「沈黙」という言葉があてはまるのは、昭和末期ではなく最近の学界の状況である。『源氏物語を読むための研究事典』（注16）が出

版された平成七年の頃から平成十二年七月現在、昭和の論文の書き直しや、『源氏』専門家なら誰でも知っているはずの武田氏説の概要・青柳秋生氏説の概要のまとめ直しを除いては、玉鬘系に関する論文は全く発表されていないと言ってよい。

しかしながら私が研究を開始したのは、成立論特集号が出た直後であったので、武田氏説の再検討に全力を傾けることに決めた。その最初の成果が平成二年度中古文学会秋季大会の「かの十六夜の女君 ― 蓊巻晩秋の新解釈 ― 」であり、翌三年五月の『中古文学』47号でも同じ表題副題で活字発表したが、要点は、従来から注目されている

かの十六夜（いさよひ）のさやかならざりし秋のことなど、さらぬも、さまざまの好き事どもをかたみに隈なく言ひあらはし給ふ、

という蓊巻の一文を

末摘花の姿がはっきりとは見えなかった秋の新枕のことなんか……

と解釈することにある。花宴巻の「かの有明」が女性の人物呼称であるので、「かの十六夜」も末摘花の人物呼称だと私は考えている。ちなみに、「言ひあらは（す）」は、昭和57年の集成本などでは、光源氏と頭中将が互いの秘密を暴露し合う、と解釈しているようだが、私は行幸巻の「申しあらは（す）」という用例に基づいて、自分から「白状する」と解釈した。

平成五年に出版された新大系第一巻は三一七頁注三八として右の一文を取り挙げ、

十六夜の月がはっきり見えなかった秋のこと。源氏が末摘花を訪れ、頭中将に見つけられたのは春であった。→末摘花二〇九頁。（三一八頁下段）

と述べて居るが、どのような意図なのか、そして、蓄積された過去の研究に対してどのような立場を取っているのか、今もってわからない。脚注は紙幅の制限が厳しいものだが、紙幅にかなり余裕があるはずの新大系全五巻各巻巻末論文の中にも、右の「注三八」に関して触れるところが無い。研究史上の位置から考えても「注三八」は六人の校注者全員の合意と私は受け取っている（注17）が、他の学術誌を繙いても、右の一文に関する六人の御高見を知ることは平成十二年現在できていない。ともあれ、具体的な根拠に基づく反論と対案とが突きつけられない限り、私としては、平成三年に活字発表した人物呼称説を撤回するわけには行かないのである。

なお、平成11年、吉岡曠氏は「源氏物語の構造」の中で蓊巻の一文が紅葉賀巻の源典侍事件を指すと述べ（324頁2行～325頁1行）、第一に「秋のこと」に就いて（325頁2行～12行）、第二に「さやかなら

ざりし」に就いて（325頁14行～326頁1行）、第三に「かのいざよひ」に就いて（326頁1行～2行）独特の説を発表している。この論文は〔付記〕にある通り、氏自身の手に成る過去の幾つかの論文を再構築したものであるが、掲載された『源氏物語研究集成』という叢書（第四巻掲載）の性格から、平成11年の時点に於ける吉岡氏の所見と受け取らざるを得ない。しかし、今、第三の「いざよひ」の論証一つを取り挙げてみても、

「いさよひの」は「さやかならざりし」を導く序詞的表現ということになるだろうか。

だけで終わってしまうのは何とも不充分である。序詞や枕詞であると断定するためには上代や平安の規範的な歌集から引例しなくてはならないはずである。既に伊藤博氏が、成立論特集号の「武田宗俊説をめぐって」の中で、

「十六夜」を序詞的なものと解し、これを源典侍挿話を受けたものとする吉岡氏の論法も、納得しがたい。源典侍とのそれは「十六夜」のこととは書かれていないのに「かの十六夜」とは言わないだろう。

（「かの」には傍点 ― 田村注）

と述べている通りである。

逆に「十六夜」という言葉を重視したのが、光源氏が初めて末摘花邸を訪れた時のことを指すという解釈である。その、末摘花巻〔四〕段落には、

もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月

という頭中将の揶揄もあり、一見、下の句が葵巻の一文と照応しているように考えられる。室町から現代、それも平成十二年現在に至るまで提唱され続けている説であるが、この説が成り立たないことをはっきりさせるために前拙稿「かの十六夜の女君」では、「さやかなり」の全用例を列挙したのであった。『源氏物語』の「さやかなり」「さやかならざりし」は男（頭中将）が男（光源氏）の行方を「はっきりつかむ」「はっきりつかまない」という意味には成りにくい。人事に関して使われる場合、男が女の容貌を「はっきり見る」「はっきり見ない」という意味になることがわかる。特に用例ロや用例トに拠れば、空蟬や明石上のような容姿の劣った女性の場合、光源氏は新枕の際、「さやかに」見なかったことが推定されるのであって、その意味でも末摘花との新枕を形容するのにふさわしいのが「さやかならざりし」ではなかろうか。

この説の第二の弱点は季節の食い違いである。季節と人間の行動・感情とが密接に結び付いていた当時、文学作品の作者や読者が、初冬を「秋」と呼ぶくらいならと

もかく、春の出来事を「秋のこと」と錯覚させたり錯覚したりするはずがない。そこで、「秋のこと」の直前に読点を打って、「さまざまの好き事ども」の第一を「かの十六夜のさやかならざりし」、第二を「秋のこと」と解釈する説が編み出されることとなった。しかし、「秋のこと」と「かの十六夜」とは、或いは、「秋のこと」と「かの十六夜のさやかならざりし」とは、並列させるにはあまりにも対偶性が無さ過ぎる、あまりにも格が違い過ぎるので、この説のためにはもう少し語法上の補足資料が必要であろう。

例えば、総角巻巻末に、

四方の山の鏡と見ゆる、汀の氷、月影にいと面白し。京の家の限りなくと磨くもえかうはあらぬはやとおぼゆ

という自然描写がある。「鏡と見ゆる」は、長年、下の「汀の氷」に係ると説き誤まられていたが、実は、同格助詞の「の」（「山の」の「の」）に導かれて、上の「四方の山」に係る連体修飾節であった。この場合、比較の対象となっている

京の家の限りなくと磨く

という名詞節が

四方の山の鏡と見ゆる

の文法構造を種明ししているのである（注18）。

かの十六夜のさやかならざりし、秋のこと

と二つに分けて読む説を積極的に主張するためには、これと同じような語法上の説明を補足する必要がある。私の人物呼称説の場合、当該文を含む葵巻〔二〇〕段落とよく似た賢木巻〔二三〕段落の中の

かの斎宮の下り給ひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど、

が語法上の補足資料となり得る。

①「かの」　②女性の人物呼称　③助詞「の」　④②の女性の動作・様態　⑤過去の助動詞　⑥時を示す短い名詞　⑦助詞「の」　⑧「こと」　最後に「など」

という構成になっているからである。

以上、葵巻の「かの十六夜」が、「十六夜の月の下、光源氏が初めて訪問した女君」、即ち末摘花の人物呼称であることを確認して来た。その結果、紫上系巻々に玉鬘系の事件・人物を踏まえた箇所がないという、武田氏指摘の「法則」は成り立たないということになり、玉鬘系後記挿入という事実自体は否定せざるを得ない。しかしながら、たとえ「法則」は成り立たなくともそのような「傾向」は看取できる。その上、玉鬘系と紫上系の間に、男女両主人公の呼方（武田氏論文第五章）、各巻の冒頭（武田氏論文第六章）、文体・技巧・人生観（同第

七章）の各方面に就いて、顕著な違いがあるのはどうしてだろうか。

玉鬘系の紫上系からの独立の原因として、従来最も有力だったのは、昭和三二年『源氏物語の研究 ― 成立に関する諸問題 ― 』（長谷川和子氏）、成立論特集号の鈴木一雄氏論文及びほぼ時を同じくして初出された今西祐一郎氏の「源氏物語の構造と身分」（注19）にあるように、女性作中人物の身分との関わりであった。長谷川氏らは玉鬘系を中の品の女性が中心となる系列、中の品系と呼んでいる。しかしながら、以上三氏も認めて居る通り、系の後半で中心となる玉鬘は実父・養父の身分から「中の品の女」とは言いにくく、又、その物語の舞台も上流世界である。系の前半六帖にのみあてはまる仮説というのは、玉鬘十帖は平均して一帖の分量が少ないので「根拠6　対　反例10」とは言わないまでも、「根拠5割　対　反例5割」ということになってしまい、はなはだ統一性に欠ける。系の後半の変貌も含めてより統一的に説明する仮説は、『うつほ物語』第二主題系が「下の品の女である俊蔭女中心から、上の品のあて宮中心へ」と変貌する現象を投影しているというものである。その他、物語各単元のストーリー、和歌の詠まれ方などからも『うつほ』第二主題系が玉鬘系の、『伊勢物語』が正伝の原型となっていることを述べたのが「光源氏物語現行形態試論」（注20）、同「第二」（注21）、同「第三」（注22）であった。本拙稿では、季節の面に限定して、右のような系列ごとの出典考証を行なった。まとめると図5図6の通りである。

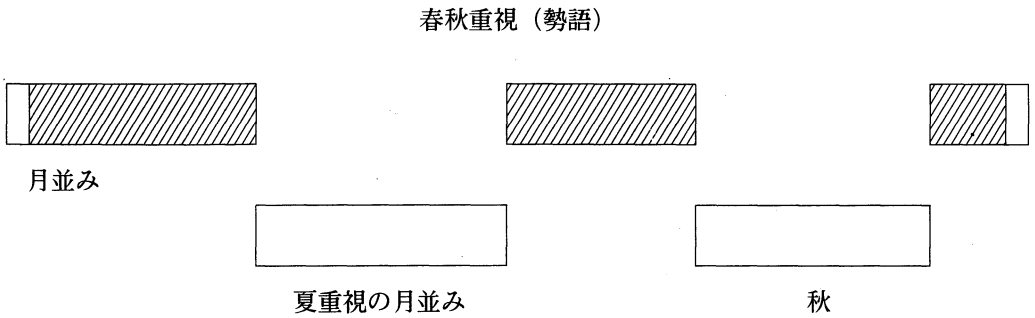


図5　光源氏物語全体

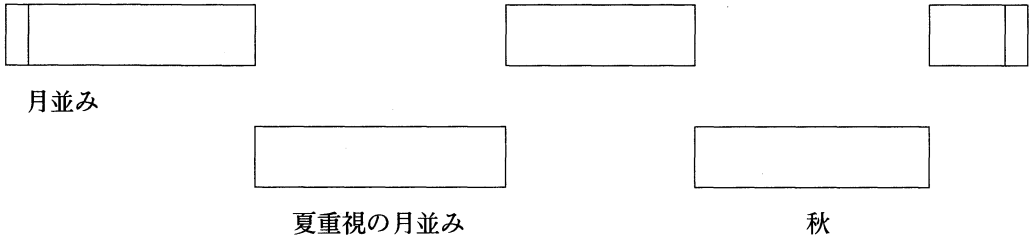


図6　うつほ物語全体

図6の下のブロックの左側、即ち『うつほ』の第二主題系後半が夏中心の月並みの求婚歌に拠って繰り広げられるのに対応して、図5の下のブロックの左側、即ち玉鬘系後半が夏中心の月並みの巻々となっている。図6の下のブロックの右側が秋中心の物語であるのに対応して、図5の下のブロックの右側も「秋」と記して置いた。第二帖「帚木」の夕顔、第四帖「夕顔」の夕顔、第六帖「末摘花」の末摘花と、俊蔭女は三つの巻に分散して投影しているが、三巻とも秋中心の物語である。図6の左端の「月並み」というのは楼の上下巻のことであるが、対応する図5の左端の「月並み」は幻巻のことである。図6の上のブロックは音楽を主題とする第一主題系であるが、図5の上のブロックはこれと対応しない。従って、ここだけ斜線を引いて置いた。ここには『伊勢物語』という、もう一つ別の作品が原型として用いられ、その季節観を反映して春秋重視の系列となっている。光源氏物語の二重構造は、〝夏の文学〟『うつほ物語』と〝夏嫌いの文学〟『伊勢物語』とを合体融合した紫式部の手腕に由来するのである。

私は二者択一的に問われたら、武田氏説を否定する立場と答えざるを得ないが、以上明らかにして来たように、決して否定のための否定、全部つぶしてゼロから再出発するための否定ではなく、ポシティブに再構築して行くための否定である。

では、武田氏論文をポシティブに再構築して行くとはどういうことか。主として第五章～第七章で明快にされたような玉鬘系紫上系の特徴のあれこれを、それぞれ、紫式部が比較的『うつほ』から学んだもの、比較的『伊勢』から学んだものとして捉え直して行くこと、そして成立論賛否双方の学者が着目したような巻と巻との接続、作品全体の結構については、紫式部が『うつほ』から学んだものとして捉え直して行くということである。

では、その肝心の『うつほ物語』は、紫式部の時代にはどのように享受されていたのか、次の第4節で考えてみたい。

4

『うつほ物語』の第十一帖「内侍のかみ」に、年中行事に関する評論的な箇所がある。「年の内出で来る節会の中に、いづれ、いと切に労ある、定め申されよや」という春宮の御下問に、大将正頼が

「年の内の節会、これをいづれと労ありて、朝拝など聞こし召す時は、いと面白く、内宴を聞こし召す時も、いと労あり、面白し。三月の節会は、花とく咲く時はいと労あるほどなり。さて、なほ殊なる花

などは咲かぬほどなれど、あやしく、なまめきて、あはれに思ほゆるは、五月五日なむある。短き夜の、ほどなく明くる暁に、時鳥のほのかに声うちし、五月雨れたる頃ほひのつとめて、菖蒲、所々にうち靡きたる、香のほのかにしたるなむ、あやしく興まさりて思ほゆる。菓物などの盛りにはあらぬほどなれど、わづかに時過ぎたる物などのあるなむ、いと労ある。節供など聞こし召す時に、はた、さらにもますものなし。七月七日、をかしうはあれど、殊なる面白きことなくなむある。かれも、あり様になむ。九日も、吹上を思う給ふれば、いとこそ労あれ。それより後は、『五日には劣る』となむ思う給へらるる」

と回答し、帝も同調して、

「いとよう定め給ふなり。思ひしごとなり。『さらに、年の内の節会見るに、五月五日にます節なし』となむ思ふ。花橘・柑子などいふ物は、時過ぎて古りにたるも、めづらしきも、一つに交じるなむ、いとをかしき。そこにますものなくなむ。節する時の騎射・競馬も、さらに見所なしかし」

とにっこりなさっている（以上、381頁）。『うつほ物語』が夏の自然美を最も好んでいること、更には、それで全てが語り尽くされるわけではないけれども春の視覚美、秋の聴覚美に対して夏の嗅覚美を重んじていることを示す随筆的箇所と言えよう。野村精一氏はこの箇所と『枕草子』「正月一日、三月三日は」の段との関連を指摘している（注23）が、確かに清少納言も、以下「五月五日」、「七月七日」、「九月九日」の節会に言及し、それ以降の年中行事、言い換えれば冬を無視している。更に私が重要だと思うのは、「節は」の段である。

節は、五月にしく月はなし、菖蒲、蓬のかをりあひたる、いみじうをかし。……今日は心ことにぞなまめかしき。夕暮のほどに、郭公の名のりしてわたるも、すべていみじき。（注24）

まず、「節は、五月にしく月はなし」という断定的な論調、その理由として第一に菖蒲の香り、第二に「なまめく」「なまめかし」という形容語、第三に聴覚的には「時鳥」を挙げている点等々を考え合わせると『うつほ』の381頁の影響は疑いようもなくなるのである（注25）。『枕草子』全体の傾向として、田中新一氏は夏への強い関心を指摘し（注26）、図7に示した通りだが、中でも五月の郭公や菖蒲には異様に執着していたこと、三田村雅子氏、小山利彦氏、車田直美氏、古瀬雅義氏が説く通りである（注27）。

清少納言は少なくとも第十一帖までは『うつほ』を読んでいた。『枕草子』（及び私家集数篇など『枕』

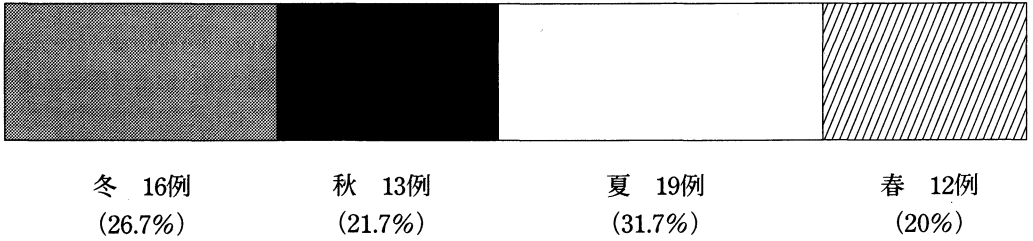


図7「枕草子」季節語使用例（田中新一氏『平安朝文学に見る二元的四季観』259頁4行目）

と同時期の文献）の『うつほ』享受の例として有名になっているのは、仲忠・涼の優劣論争であるが、本拙稿は人物の優劣ではなく季節の優劣をテーマとしているのであまり言及しないことにする。但し、仲忠の活躍に就いては、清少納言たちがダイジェスト版、絵巻等に拠って二次的・間接的に享受していた可能性も少しは残っているが、右の随筆的箇所は、仲忠中心の音楽譚とも、あて宮の求婚譚・立坊争いとも直接関係の無い、極端に言えば、雑談・脱線の部分である。清少納言は、このような雑談を含めて、二ケタの巻々から成る長編物語を一ページも飛ばさずに熟読していたようである。

『うつほ物語』は各巻が独立した短編として発表されて、それらが合成発展して長編となったという説がある。事実、第一帖「俊蔭」、第二帖「藤原の君」の冒頭

○昔、式部大輔、左大弁かけて、清原の大君、皇女腹に男子一人持たり。

○昔、藤原の君と聞こゆる、一世の源氏おはしましけり。

も、古代物語の冒頭構文

①不定の時を示す詞　②主人公、若しくはその親など　③存在の動詞　④過去の助動詞

に近いものがあるし、内容的にも、第三帖「忠こそ」を含めて、短編として独立しているように見える。だが、紫式部が目にしていたのは「うつほ物語の最初の形態」ではなく合成発展した後の『うつほ物語』、恐らくは第二十帖「楼の上下」まで、短くとも第十一帖「内侍のかみ」までの長編である。『うつほ』が少なくとも第十一帖までの長編として流布し、長編として享受されていた以上、『うつほ』の一巻は『源氏』の二巻か三巻ぐらいに相当するから、紫式部も第二十何帖、或いは第三十帖「藤袴」ぐらいまでは一箇のまとまった長編小説として発表できるという希望が持てて居たのではなかろうか。

『源氏物語』の執筆のきっかけとして、中野幸一氏は、大斎院サロンへの対抗意識を挙げ、次のように述べて居る。

○斎院方への対抗 ― それはあくまでも文学の上での対抗である。紫式部がことさら長編『源氏物語』の執筆を決意したのは、おそらく斎院方の同類文学への対抗からであろう。斎院方の長編物語 ― それはほかならぬ『うつほ物語』ではあるまいか。

○文学史上特記すべき『源氏物語』の驚異的な文学的達成も、先行の大作『うつほ物語』を大きく意識して、その超克を目標としたために為し遂げられたといっても過言でない。（注28）

「対抗」意識はともかく、紫式部が『うつほ物語』を大きく意識していたことは、絵合巻の物語合わせによっ

ても明らかである。その『うつほ』の作者が第十帖「あて宮」の前半で求婚譚に終止符を打ち、更にその後の展開まで書き続けていた以上、紫式部も玉鬘求婚譚が終幕を迎える第三十帖「藤袴」ぐらいまでの構想は頭の中で描きつつ、『源氏物語』執筆を開始したのではなかろうか。第三帖「空蟬」、第六帖「末摘花」は言うに及ばす、第二帖「帚木」、第四帖「夕顔」、第五帖「若紫」の巻頭に着目してみても、前述の古代物語冒頭構文に必ずしもあてはまらない。紫式部はこれらの巻々を長編物語の一部分として読むよう読者に期待していたのであろう。このような現行の『源氏物語』は、矛盾無く読める一箇の有機的統合体であるに留まらず、やはり、『源氏物語』の最初の形態である可能性が高いだろう。

『源氏物語』は、中野幸一氏も喝破して居られるように、けっして突然変異の傑作ではないのである（注29）。『うつほ物語』の文学的達成とそれを熱心に支持する女房達、享受者層によって必然的にもたらされた長編物語である。昭和の源氏物語研究、特に昭和四十一年の玉上琢彌氏『源氏物語研究』は『うつほ物語』を失敗作と決めつけて、『源氏』との間には「めくるめ」く程の大きな隔絶があると述べている（注30）が私はそうは思わない。私が私なりの比喩を以て言うならば、『うつほ物語』の季節に花咲き、実を結んだ大粒の果実が『源氏物語』なのである。

5

武田宗俊氏の成立論に対して、「成立論は不毛だ」、或いは、戦後という一時期でのみ役割を果たし、既に使命は終わっている、というたぐいの言葉は、その矛先が武田氏論文の第十一章、即ち「作者の精神発展」説、「文芸観、人生観」が「多大の生長発展」を遂げたのだという説に絞られている場合には、一つの意見と言えよう。しかし、第五章～第七章で列挙された紫上系玉鬘系の様々な違いは厳然たる事実として認められるものであり、貴重な発見なのである。

国東文麿氏に拠る「二話一類様式」の発見は、その最終目的であったはずの『三宝感応要略録』出典説が否定されたにもかかわらず、『今昔物語』研究史上確固たる位置を占め（注31）、又、本居宣長や石塚龍麿に拠る上代特殊仮名遣いの発見は、百年後の橋本進吉氏の研究と比べるとその意義が不明瞭なまま提示されたにもかかわらず、国語学史上輝かしい成果とされている（注32）。「作者の精神発展」説の使命は終わったからと言って武田氏論文を過去の遺物として葬り去り、所謂「新しい」研究のみを追い求めるのは、どうやら独り平安物語研究のみの風潮であるようだ。

玉上氏は、かつて御自分も熱心に参加していた成立論から昭和二十七年に撤退する際、

こういう順序（＝現行巻序）で読んでゆくよりも、成立順序についての新説（＝武田氏説）に従って読むほうが、勝れた観照になるのであろうか。最小限度、はたして一層合理的な理解となるのであろうか。

いまのところわたくしは、なお、古来の巻序に従って、もう一度あらためて『源氏物語』を読んでみたい。現在の『源氏物語』をそのままに素直に受け取る読み方をしてみたい、と思うのである。

（カッコ内は田村）

と述べていた（注33）。しかし、「現在の『源氏物語』」とはいかなる形態か。論文の書き方や論者への好き嫌いを抜きにしてそれこそ「素直に」読むならば、紫上系という松に玉鬘系という藤がからみついた形態、という以外にどのような答えが用意されるのだろうか。だとすれば、いかなる論者もまず素直に武田氏の功績を認め、源氏物語研究の出発点として、紫上系玉鬘系の二重構造を総合的に把握すべきなのである（その意味で、成立論特集号の吉岡曠氏には心から賛意を表する次第である。

教室で源氏物語の講義をするときには、十年一日のように後記説の話を枕にする。主婦などを対象とする話を頼まれた場合でも、臆面もなく後記説の話をする。源氏物語の作品論を卒業論文にする学生には、何を論ずるにせよ、まず後記説をまともに勉強して、自分なりに賛否の判断をはっきりと持ちなさいと忠告する。そうすることが教師としての、あるいは現代の源氏学者のはしくれとしての義務だと考えるからである。

（224頁）

繰り返すことになろうが、右の吉岡氏論文を含む成立論特集号所収論文に呼応して、私は研究を続けてきたのである。）。次に、二重構造をどのように解釈し、そこに如何なる意義を見い出すかは論者一人一人によって異なってくるだろうが、私なりの答えは「成立順序に由来せず、『うつほ物語』に由来する」という一案であった。作品論に於いて先蹤の指摘は必要不可欠なのかと問われれば、少なくともこの場合には意義があると答えたい。『源氏物語』のような大きな作品が、一見支離滅裂で技巧も未熟、但し、信念に基づいて粘り強く書き綴られた長編物語を先蹤とするという事実は、従来の日本文学史観に一石を投ずることになるかもしれない。いずれにせよ、校注書のせいもあってか昭和期にはそれほど陽の当たらなかった『うつほ物語』の影響を正当に評価して行くことは、ともすれば優雅で高尚な面、絵に成るよ

うな段落ばかりが注目されがちであった『源氏物語』をもう少しバランス良く味読して行くためにぜひとも必要だと私は思うのである。

注

（1）「光源氏物語現行形態試論」、『国語国文』平成2年10月号所収。

（2）『高千穂論叢（昭和63年度1）』所収。

（3）中野幸一氏も物語が不特定多数の読者を対象としつつも第一に女房階層の批判を念頭に置いている旨、論じている。昭和46年『物語文学論攷』の第八章、第五章、特に87～88頁。

（4）『源氏物語』の引用は、新全集に拠る。

（5）『平安朝文学に見る二元的四季観』238頁。田中氏は暦月意識と節月意識に基づき、二元的に季節を論じて居られる。

（6）図1の作製に当たっては、『源氏物語大成　校異篇』を用いた。例えば、春と見做されるのは21ページと約4行、秋は19ページと約6行であったが、同本は1ページが14行なので、春21・3頁、秋19・4頁とした。他の季節に就いても同様。図3に就いても同様。

（7）『うつほ物語』の引用はおうふう版『うつほ物語（全）』（平成7年）に拠る。巻序、題号の表記等も同本に従う。

なお、前拙稿「光源氏物語現行形態試論」（平成2年）等で引用校注書とした大系『宇津保物語』第一巻～第三巻に関して、私個人は第一巻第三巻巻頭の解説に大いに影響を受けたのであるが、校注書として必ずしも良質でないとの教えを受けたことがある。底本が校注者の河野多麻氏の意向に沿わぬ延宝五年板本であるせいもあって、改訂が多過ぎるのは確かだが、この点に就いても、広く大方の御教示を仰ぎたい。但し、私の「宇津保系」という名称は、大系に倣って、既に漢字（万葉仮名）表記にしてしまったので、このまま改めずに用いることにする。

（8）「夕霧」〔二〕に関しては、玉上琢彌氏『源氏物語評釈』で指摘されている。

（9）私の分類では桐壺前半と若菜三帖（第三十四帖「若菜上」、第三十五帖「若菜下」、第三十六帖「柏木」）とは勢語系に含まれないので、調査の対象からはずした。注1の前拙稿を参照されたい。又、桐壺後半は、季節不明なので、調査の対象からはずした。

（10）「源氏物語の季節と物語 ― 春」、『高千穂論叢（昭和63年度1）』所収。
（11）今西祐一郎氏「伊勢物語・恋と死」、『国文学解釈と教材の研究』昭和54年1月号所収。
なお、私見に拠れば、『伊勢物語』第一次章段は比較的視覚重視、幻巻を含めて紫式部の自然描写は視覚聴覚嗅覚を兼ね備えた立体的なものである。
（12）「光源氏物語現行形態試論第三 ― 後期巻々を中心に ―」、（平成5年）
なお、野口元大氏も同じ趣旨の指摘を夙くなさっていることに最近気付いたが、私は楼の上下巻と幻巻のみが対応すると考えている。御法巻は春秋偏重で、月並み記事とは言いにくいものがある（野口氏「源氏物語が竹取・宇津保から受けたもの」、『国文学解釈と鑑賞』昭和43年5月号所収。「物語の結収 ―『うつほ物語』「楼の上」を中心に ―」、『国文学解釈と教材の研究』平成10年2月号所収。）。
（13）『国語と国文学』昭和15年5月号所収。
（14）「桐壺」〔九〕、35～36頁参照。
（15）「源氏物語の最初の形態」、『文学』昭和25年6月号7月号に初出。以後、昭和61年の成立論特集号その他に再録されている。
（16）『国文学解釈と教材の研究』平成7年2月号として出版された。
（17）新大系『源氏物語』全五巻各巻の凡例一〇に「本書は六人の校注者の共同討議を経て執筆したものである。」と記されている。
（18）拙稿「雪と月 ― 総角巻末独詠連作段落の再評価 ―」、『国語国文』昭和63年7月号所収。
（19）『国語国文』昭和60年3月号に初出。その後、「物語と身分」と改題されて、今西氏『源氏物語覚書』（平成10年）に再録。
（20）所収は注1参照。
（21）『北陸古典研究』7号（平成4年）所収。
（22）『富山大学人文学部紀要』19号（平成5年）所収。
（23）「光源氏とその"自然" ― 六条院構想をめぐって ―」、阿部秋生氏編『源氏物語の研究』（昭和49年）所収。
（24）『枕草子』の引用は新全集（底本は三巻本系）に拠る。
（25）『うつほ物語』381頁の箇所について、高橋亨氏も「『古今集』的といってもよいが、より直接的には『枕草子』に近い。」と述べている。

「長編物語の構成力 ― 宇津保物語「初秋」の位相 ―」、『日本文学講座 4』（昭和62年。大修館）所収。なお、副題に使われた「初秋」という巻名は「内侍のかみ」の別名である。

（26）『平安朝文学に見る二元的四季観』259頁。

（27）三田村氏「枕草子「職の御曹司におはします頃」章段の性格」、『国文学研究』七〇（昭和55年3月）所収。小山氏『源氏物語 宮廷行事の展開』（平成3年）。車田氏「「尋郭公」考 ― 『枕草子』「五月の御精進のほど」の段をめぐって ―」、『中古文学』54号（平成6年11月）所収。古瀬氏「清少納言と郭公詠 ― 郭公詠の伝統と創造の間の苦闘 ―」、『古代中世国文学』6（平成7年3月）所収。

（28）「うつほ物語の享受 ― 清少納言と紫式部のうつほ物語に対する意識をめぐって ―」、『学術研究』11（昭和37年11月）所収。

（29）『物語文学論攷』の「後記」。

（30）142頁等参照。

（31）例えば、池上洵一氏『今昔物語の世界』（昭和58年）の264～266頁で、このあたりの事情がわかりやすく解説されている。

（32）例えば、橋本進吉氏『古代国語の音韻に就いて』（昭和55年、岩波文庫）等で、このあたりの事情がわかりやすく解説されている。

（33）「源氏物語の構成」、『文学』昭和27年6月号所収。玉上氏『源氏物語研究』に再録。